

今後の展望

人と自然の関係を 言語から考える

安成哲三

ことの発端は、石川さんのコメントにもあるように、彼がリーダーを務める研究プロジェクトのタイトルである「エリアケイパビリティ (Area Capability)」の適切な和訳はできないかという (私をふくめた複数人からの) 質問からだった。とてもユニークな研究なので、日本人の研究者や研究者以外の人たちにも通じるような和訳をつ

けたほうがいいと私は思っていた。石川さんご自身も同じ気持ちだとわかったので、同じく人間文化研究機構に所属する国立国語研究所 (以下国語研) の方がたのお知恵を借りられないかと思いついた。

科学の用語を翻訳することは重要である。明治政府は日本の近代化の一環として、西欧の近代科学におけるさまざまな概念や用語を、基本的にすべて日本語に翻訳するという大事業に力を入れた。そのおかげで、私たちは近代科学のすべての分野について、教科書・専門書もふくめ母国語の日本語で教育を受けることが可能になっている。多くの日本人は当たり前のように

思っているかもしれないが、じつは欧米諸国以外の国で、このことが可能になっている国は稀である。私たちは、長い歴史と文化に培われた母国語で科学も考えているのである。

「客観性」や「普遍性」を建前とする自然科学という分野においても、自然に関するさまざまな記述や考察を日本語で行なうことで、良くも悪くも私たちのなかに染み込んだ日本の文化、日本的発想がかなり小



り反映していることになる。ノーベル物理学賞や化学賞を受賞した日本人研究者の多くが、「私は日本人だったから受賞できた」という趣旨の発言をしているが、彼ら

地域や民族で、「人は自然をどう捉えているか」、「環境をどう理解しているか」などを考察できる。人と自然とのかかわり方をことばという表現形をととして理解すること

の独創性が日本的発想と密接に関連して出てきた結果であったことを示唆している。

このことにも関連するが、同じ自然現象や環境に関することばも、言語により多様である。同じ日本語圏内においても、同じ対象や現象を地域によりさまざまに異なる言い方をすることが多い。逆にいえば、このことを手がかりに、それぞれの

の重要性を、先日まで地球研に滞在された環境学者・哲学者のオギユスタン・ベルク氏はその著書『風土の日本』*1で以下のように指摘する。

あらゆる言語はある一定の風土に関係づけられてはじめて正確に機能する。つまり言語は風土の確固たる構成要素のひとつであり、コミュニケーションにおける言語の必要性は、それ自体が表象するもの、あるいはしないものを上回っても下回もしない。事実風土性は細分できないのであり、仮にそうすれば意味は縮小されてしまう。すなわち、ある風土の言語の多様性において、またさらにはあらゆる言語の彼方でその風土との親密性を増すことは、コミュニケーションを促進するということである

地球研と国語研との協働による新たな言語環境学(環境言語学)の展開を期待したい。